総合教育センターだより

街路樹

発行第　147　号
令和２年１１月２７日（金）
いわき市総合教育センター
いわき市平字堂根町１－４
０２４６（２２）３７０５

道徳科の授業改善の視点と実践例紹介

学習指導要領解説　特別な教科　道徳　（以下、解説とする）では、**指導を充実させる7つの工夫**が示されています。（数字やカタカナ、枠等は分かりやすく表現するために意図的に付けました。）

①教材を提示する工夫　②発問の工夫　③話合いの工夫
④書く活動の工夫⑤動作化、役割演技などの表現活動の工夫　⑥板書を生かす工夫　⑦説話の工夫

今回は、**②の「発問の工夫」**について、解説をもとに考えていきます。

発問は、児童生徒の思考や話合いを深める上で重要な手立てのひとつです。自分との関わりの中で道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするために吟味しなければなりません。解説では、以下に述べる3点を心掛けることが大切であると示されています。

Ⅰ　考える必然性や切実感のある発問
Ⅱ　自由な思考を促す発問
Ⅲ　物事を多面的・多角的に考える発問

先日、学校訪問で授業参観させていただきました。「Ⅲ　物事を多面的・多角的に考える」に関する発問を紹介します。
T　:「主人公はどんな気持ちで親切にしたのかな？」
C1:「喜んでもらおうという気持ち。」
C2:「うれしくなってほしいという気持ち。」
など様々な答えが出ました。さらに教師は次の発問を行いました。
T　:「もし、親切にできなかったときの気持ちは？」

この瞬間、教室は静まりかえりました。子どもたちは道徳的価値を自分事として捉えようとしていたのではないのでしょうか。その後、子どもたち同士の対話が生まれました。
C3「きっと後悔する。」
C4「自分もできないかもしれない（人間理解）。」
C5「僕もC4さんが言ったこと分かります（他者理解）。」

道徳的価値の理解をもとに、工夫された発問をすることで、子どもたちは自分自身をふり返ります。そして、子どもたち同士の対話が生まれ、考えが深まります。

発問の大切さを改めて実感できた授業でした。

発達障がいと生徒指導～自尊感情への配慮～

発達障がいやその傾向にある児童生徒がいる学級では、次の二つの視点での対応が求められます。

①「個別支援（個別指導）」に基づく対応
「つまずきやすい」児童生徒に対して個に即した助言や支援を行う、取り出し授業や補習授業を行う等。

②「集団指導」に基づく対応
「つまずきやすい」児童生徒だけでなく、全ての児童生徒が互いの特性等を理解し合い、助け合って共に伸びていこうとする集団づくりを進める、分かりやすい授業づくりを進める等。

日常の指導の中では、上記の個別支援と集団指導をバランスよく行うことが大切です。また、発達障がいのある児童生徒は、幼少期からの失敗経験が積み重なり、意欲や自信を失い、「自分にはできない！」と自己評価が低くなっている場合も多く見られます。成功体験を積ませることや児童生徒の小さな変化に気づいてこまめに認めることが必要です。一方で、思春期を迎えた児童生徒にとっては、教師から特別視された支援は自尊感情の低下を招くばかりではなく、疎外感や孤立感を生じさせることにもつながりかねません。「特別な支援」のつもりが「特別視した支援」となっていないか常に意識し、本人の反応や様子を十分に確認しながら支援を進めていきましょう。これは全ての児童生徒に必要な視点です。

上記内容についての詳細は、国立教育政策研究所ホームページ掲載の「生徒指導リーフＳシリーズ（令和２年６月発行）」をご確認ください。特別支援教育の視点がより重要となってきているものについて、国立特別支援教育総合研究所と共同で作成されました。他、「不登校の予防」「中１ギャップの真実」についても参考になりますので、是非ご覧ください。

学校司書研修より

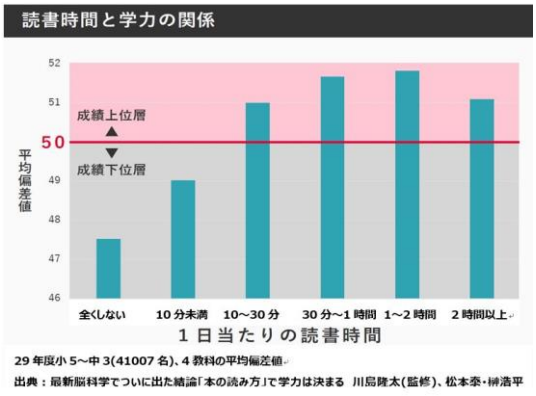
11月6日(金)に「読書活動支援者育成事業いわき地区研修会及び学校司書研修」がありました。講義の一つに東北大学准教授　榊浩平氏による「脳科学的見地から捉える読書の効用」がありました。今回はそのお話の中からご紹介します。

1　「読書する子は頭がよくなる」は本当?

長い間、言われてきたこの言葉。学力と読書の相関関係が全国学力・学習状況調査の分析で見えてきました。一日10分以上読書をする子どもは、しない子どもに比べて上位の成績を取っていることが分かります(下グラフ参照)。これは、読書中の脳は視覚野や言語を司る部分、高次機能の中枢である前頭前野などの働きが活発になること、読書によって読解力に必要な神経回路が強化されることが関係しているといえます。ちなみに、2時間以上読書をしている子どものグラフが少し下がっているのは、「読書をしすぎて成績が下がった」のではなく「読書の時間が多かった分、睡眠や学習の時間が減っている」ことに起因しているそうです。

2「紙の本」VS「電子書籍」

紙の辞書とスマホで言葉を調べる作業をすると、一分間で調べられた単語数は辞書が3つ、スマホが5つ。ところが、その際の脳の働きを比較したところ、脳が活発に働いていたのは辞書の方で、スマホの時は脳の活動が抑制傾向になっているという気になるデータが出ているそうです。軽くて薄く、大容量というスマホや電子書籍、タブレットなどと、従来の紙の本や教科書との共存、使い分けというのは、今後学校現場でも慎重に見極めていく必要があるといえるのではないでしょうか。



※データをより詳しくご覧になりたい方は、総合教育センターまでお知らせください。